

# 敦煌禅宗資料分類目録初稿

## II 禅法・修道論

[2]

田 中 良 昭

### 6 修行最上大乘法（擬）

① S. 2973 ② S. 6958 ③ P. 2104

[移録]①② 田中良昭「『南天竺国菩提達摩禅師觀門』と『修行最上大乘法』（擬）」〔『駒沢大学仏教学部研究紀要』23 pp. 128-129〕1965.

[論文]

田中良昭『南天竺国菩提達摩禅師觀門』と『修行最上大乘法』（擬）〔『駒沢大学仏教学部研究紀要』23〕1965.

[略記] 『修行最上大乘法』という擬題は、本書の最初が「夫欲修行最上大乘法者」（③は「夫欲修行最上乘者」である。）で始まることから与えられたものである。この「最上大乗」乃至は「最上乘」の呼称は、「小乗」を超える「大乘」，「大乘」を超える「最上大乗」乃至は「最上乘」という価値批判的な用語であって、中国仏教における歴史的課題を担った重要な意味を持つ。特に初期の禅宗文献にあっては、五祖弘忍の『修心要論』が『最上乘論』，六祖慧能の『壇經』が『南宗頓教最上大乗摩訶般若波羅蜜經六祖惠能大師於韶州大梵寺施法壇經』，浄衆宗の燈史である『歴代法寶記』が『最上乘頓悟法門』というように、大乘中の最上大乗として達摩禅の位置づけが主張されたが、その後更に密教の伝来に及んで、この新来の密教に対する名称として用いられるようになった。

本書の内容とするところは、安心出定後真言を誦しつつ觀想觀念を続け、遂には自身が觀世音菩薩そのものとなって衆生悉くを成仏せしめることを説く密教の儀軌であり、狭義には禅宗文献とはいえない。しかし②では、禅宗文献の『南天竺国菩提達摩禅師觀門』の末尾に付せられた「大声念仏十種功德」の第3以下第10の「往生浄土」までを取り去り、それに代えて第3の内容として本書を將ち来っていることからすれば、明らかに禅宗文献が密教的に改変されたとみるべきである。

更に③は、鈴木大拙氏が『禅思想史研究』第2の第7篇に、「敦煌出土本中、禅に関する文献七種につきて」と題して紹介された第4の『禅門秘要決 招覺大師一宿覺』の原本である P. 2104（尚これと密接な関係のあるものに P. 2105 があり、その写真は昭和47年渡欧の際撮影を依頼し、既に将来済である。）の末尾にあるダラニ集の最後に存在するもので、この一本も永嘉の『證道歌』や三祖僧璨の『信心銘』をはじめとする禅宗文献との連写であって、禅宗と密教との密接な関係を示す資料である。

この意味からすれば、本書は禅と密教との交渉、更には「大乘」としての禅と念仏を超えた「最上大乘」としての密教の立場を挙揚しようとした貴重な資料とみるべきである。尚、①の裏（実際は表）に開宝3年（970）8月、③に太平興国5年（980）5月18日の日付があり、共に宋初に書写されたことが窺われる。

## 7 證心論〔澄心論〕

① S. 2669 ② S. 3558 ③ S. 4064 ④ P. 3434

⑤ P. 3777 ⑥ 裳 75 ⑦ 竜谷大学所蔵 122『観門法大乘法論』本

〔移録〕⑥ 鈴木貞太郎（大拙）『燉煌出土少室逸書』影印 pp. 35-36 1935.

⑥ 鈴木貞太郎（大拙）『少室逸書及解説』pp. 52-54 1936.

①②③ 鈴木大拙『禅思想史研究』第2 pp. 469-470 1951.——尚これは後に、『鈴木大拙全集』巻2 pp. 443-444 1968. として改訂出版。

### 〔論文〕

鈴木貞太郎（大拙）「證心論」及び添附の五行文について〔『少室逸書及解説』pp. 48-49〕1936.

鈴木大拙 無心論及観門及倫敦本 S. 2669 号長卷子〔『禅思想史研究』第2 pp. 213-220〕1951.——尚これは後に、『鈴木大拙全集』巻2 pp. 209-216 1968. として改訂出版。

関口慈光（真大）「證心論」の撰者についての疑義〔『宗教研究』131〕1952.

関口慈光（真大）「證心論」（燉煌出土）について〔『印度学仏教学研究』1-2〕1953.

関口慈光（真大）「證心論」（燉煌出土）の撰者について〔『印度学仏教学研究』2-1〕1953.

関口真大 燉煌出土「證心論」は天台大師の撰述たるを論ず〔『台門学報』1〕1956.

関口真大 燉煌出土「證心論」は天台大師の撰述たるを論ず（二）〔『台門学

報』2) 1957.

関口真大 「證心論」と天台止観法門 [『達摩大師の研究』 pp. 246-294] 1957.

〔略記〕 本書は古く 1934 年に、禿氏祐祥氏が竜谷大学図書館所蔵の敦煌出土長策子本『西天竺国沙門菩提達摩禪師観門法大乘法論』を紹介された（「少室六門集に就いて」 [『竜谷学報』 309] 1934.）際に、その中に含まれる 4 種の文献中の第 2 に『證心論』すなわち⑦のあることを報告されて以来、その存在が知られるようになったものである。ただ禿氏は、僅かにその名を挙げたのみで、その内容については何ら触れられなかった。

ところが同じ 1934 年夏に、北京の北平図書館で敦煌出土文献の調査に当られた鈴木大拙氏が、その中に⑥の北京本裳 75 を発見され、1935 年影印本『燉煌出土少室逸書』で紹介されると共に、それを解説した『少室逸書解説』で本文の校定と若干の解説を発表されたことによって、その内容が知られるようになったものである。その中で鈴木氏は本書について、「元来禅宗の大意を述べたもので、慧能、神会などの南宗派の所産であると信ずる。」と述べられている。

更に鈴木氏は、その翌年の 1936 年、今度はロンドンの大英博物館で、スタイン将来の敦煌文献を調査され、その際に①の S. 2669, ②の S. 3558, ③の S. 4064 の 3 種に、いずれも五相弘忍の『修心要論』に先立って本書が書写されていることを発見され、これら 3 本を③を底本として①②を校合し、1951 年『禅思想史研究』第 2 に発表された。特にその解説では、ロンドンの 3 本がいずれも『證心論』となっており、それらが竜谷本、北京本よりも秀れていることを述べ、本書の内容については、達摩系思想の本流に掉さすものであるが、慧能以前と鑑定してよからう、という推論をされている。すなわち鈴木氏は、先には慧能、神会の南宗系、そして今回は慧能以前の達摩系思想の本流に掉すものという推定をされたのである。ただ鈴木氏が、「篇末に『謹上聖王』とあるからには作者は誰かその時の地方の統治者にこれを奉呈したものである。」と述べられたことは、次の関口氏の論考と関連してくる重要な点である。

この鈴木氏の説に対して、その撰者についての疑義を抱き、それを問題にされたのが関口真大氏である。関口氏は鈴木氏の著書が出版された翌年の 1952 年から 1953 年にかけて、3 種の論文にその撰者についての疑義を呈され、それから 3 年後の 1956 年から 1957 年にかけて、2 回にわたり本書が天台大師智顛の撰述であることの論証を発表された。そしてそれらを総合し集約されたのが、1957 年公刊の『達摩大師の研究』に収録された「『證心論』（燉煌出土）と天台止観法門」である。関口氏の

立論の根拠とされたものは、永明延寿の『宗鏡録』巻100に引用された「智者大師與陳宣帝書」が、まさしく燉煌出土『證心論』に外ならないとする点で、その他種々の面から天台止観法門と初期禅宗との関係について論述されている。

こうして、関口氏によって本書が天台大師智顛の撰述であることが主張され、この説が今日ほぼ定説化するに至っている。しかも本書が、常に五祖弘忍の『修心要論』と結合した型で書写されていることは、初期禅宗と天台止観法門との交渉を示す資料として貴重なものとみるべきであろう。

尚写本は、上記の他にペリオ本にも④の P. 3434, ⑤の P. 3777 の2種の存在が知られるようになり、④は王重民氏と藤枝晃氏によって、⑤は井ノ口泰淳氏によってそれぞれ撮影将来されている。両者は共に禅宗文献との連写であり、④は首部を欠いているために標題は不明であるが、⑤は「澄心論」となっており、いずれもその後に『修心要論』を伴っていることは、他の写本とまったく同一である。

## 8 請二和上答禅策十道

① S. 4113

〔略記〕 本書は未だ学会に未発表の禅宗文献であり、近い将来紹介を予定しているものである。その標題からも窺われるように、2人の和上を請じ、禅の要諦に関する10種の道理について第1問から第10問までの問を出し、それに答えさせたという問答形式をとり、この10問答が2度繰り返されて全体では20問答になっている。

この2人の和上の名は、空と自であるが、恐らく仮空の人物と考えられる。最初の10問中には、第1問の『禅経』、第3問の『般若経』（原文は『般経』）、第5問の『華嚴経』（原文は『花嚴経』）、第6問の『菩薩戒経』2回（原文は『菩薩戒』と『経』）、第8問の『経』（経名は不明）というように、經典中の語句についての問が多く、後の10問は、經典の引用はなく、禅そのものに関する問答である。

特に後半には、修禅と解脱、言と黙、心と境、浄と染、無相と有相、看心と無心、方便と真実、定と恵等をテーマにして、禅の要諦が説示されており、初期の禅思想を示す資料として重視すべきものと考えられる。

## 9 先徳集於雙峰山塔各談玄理 + =

① P. 3559

〔移録〕① 柳田聖山「傳法寶紀とその作者—ペリオ 3559 號文書をめぐる北

宗禅研究資料の札記・その1—」〔『禅学研究』53 p. 55〕1963.

- ① 柳田聖山『初期禅宗史書の研究』図版 15B 1967.

〔論文〕

柳田聖山 傳法寶紀とその作者—ペリオ 3559 號文書をめぐる北宗禅研究資料の札記, その1—〔『禅学研究』53〕1963.

〔略記〕 P. 3559 の全体については, 先に伝燈・嗣承論の3.『傳法寶紀』の略記において関説したので, それを参照されたいが, この P. 3559 の出現は, 単に中国禅宗における最初の燈史である北宗系の『傳法寶紀』を完帙にしたのみならず, 更に北宗禅に関する多くの新資料を学会に提供した点で特筆すべきものである。

本書も, その P. 3559 の『傳法寶紀』に続いて書写されたもので, 12人の先徳が雙峰山の塔に集って, 各々玄理を談じたというのが標題の意味するところであるが, 勿論これは歴史的事実を伝えたものではない。標題の最後に細字で「十二」とあるのは, 集った先徳の数が十二人ということで, その十二人とは脇比丘, 馬鳴菩薩, 超禅師, 仏陀禅師, 可尊者, 昱上人, 敏師, 能禅師, 顛禅師, 道師, 蔵禅師, 秀禅師であり, この十二人の名前の右肩にはすべて△印が付されており, 本書がこの十二人の語を集めたものであることを示している。そして最後に, 「稠禅師意」とあるのは, その名前に△印もなく, 次に書写された大乘安心入道法に関する問答の標題ではないか, と考えられる。

これら先徳の言は, いずれもごく短かいものであるが, そこには脇や馬鳴等の西天の祖師をはじめ, 仏陀や法敏の如き達摩系以外の禅師をも含み, しかも能禅師と秀禅師の言を併記している点は, 南北二宗の対立意識が, 未だ明瞭になる以前のものではないかを窺わしめる点で重要である。

周知の通り雙峰山は, 四祖道信, 五祖弘忍のいわゆる東山法門の中心地であり, この門から出た人々において中国禅の発展する基礎が確立されたのである。従って, 本書は, 東山法門の流れを汲む人々によって, 東山の果たした歴史的役割を顕彰するために, その法門の淵源を西天の祖師に求めて創り出された語録集とみられ, しかも祖師自身の言葉でないものが多いと考えられる。

## 10 大滙警策 彦和尚集

- ① P. 4638

〔論文〕

田中良昭 彦和尚集とされる敦煌本『大滙警策』について〔『印度学仏教学

研究』22-2) 1974.

〔略記〕本書は、従来一般に『瀉山警策』の名によって知られ、特に宋代に曹洞宗の守遂が、『四十二章経』『佛遺教経』『瀉山警策』の三本を一本として『佛祖三経』と呼び、これに注を施して以来、禪宗における最も重要な仏経祖録として重んじられ、我国でもこれに注釈を加え、講義をなしたものがかなりの数にのぼっている。『新纂禅籍目録』によれば、『瀉山警策』は『瀉山大圓禅師警策』という題名で、12世紀後半頃大日能忍によって刊行されたことが知られ、また『佛祖三経』については、守遂による『佛祖三経註』が、門人の史徳賢によって開版されるに際して付された張銖の序に、「紹興十二年」(1139)の日付があるが、いずれにしても、12世紀以前のもの、その存在が知られていなかったのである。

ところで今回発見された敦煌出土の写本①は、その紙背（実際は表）の献物牒に、敦煌の帰義軍時代(846-1036?)に当る五代後唐の清泰年間(934-936)の紀年が、3回にわたって存在するからして、その書写年代は遅くとも980年頃とみられ、敦煌文献では他に異本もなく、現存最古の写本として、その古型を伝える貴重なものである。

その標題の『大瀉警策』の下には、「彦和尚集」とあり、この彦和尚は『景德傳燈録』巻11に、瀉山靈祐の法嗣43人中10人見録の附見として名のみ挙げるものの中に、「瀉山彦禅師」とある人を指すとみられ、この彦禅師が、師の説示された学道者の警策文を編集して一卷となしたのが本書であろうと考えられる。

写本はこの『大瀉警策』に続いて、同一人の手により『隋朝三祖信心銘』（原文は『信心信銘』）が書写され、これは流布本『信心銘』の最古の写本とされるものであるが、『大瀉警策』『信心銘』共に、今日の流布本と対比すると、誤字脱字が極めて多く、内容的には決してよい写本とはいえない。ただ馬祖以後、陸続として成立する祖師の語録が、敦煌文献にはまったく影をひそめてしまう中であって、本書の出現したことは特筆に価するといつてよいであろう。

## 11 大乘開心顯性頓悟真宗論〔大乘開心顯解脱論〕

① S. 4286 ② P. 2162

〔移録〕② 『大正新脩大蔵経』巻85 古逸部 pp. 1278a-1281c 1932.——⊕

②⊕ 金九経『菴園叢書』奉天 1934.——⊕

① 饒宗頤「神会門下摩訶衍之入蔵兼論禅門南北宗之問題」〔『香港大学五十週年記念論文集』1 図版〕1964.

②㊦ 『鈴木大拙全集』巻 3 pp. 318-330 1968.

〔論文〕

矢吹慶輝 敦煌出土支那古禅史並に古禅籍関係文献に就いて〔『鳴沙餘韻解説』第2部 pp. 538-540〕1933.

柳田聖山 禅門経について〔『塚本博士頌寿記念仏教史学論集』pp. 869-882〕1961.

饒宗頤 神会門下摩訶衍之入蔵兼論禅門南北宗之調和〔『香港大学五十週年記念論文集』1〕1964.

田中良昭 北宗禅研究序説—『大乘開心顯性頓悟真宗論』の北宗撰述について—〔『駒沢大学仏教学部研究紀要』25〕1967.

〔略記〕 本書は矢吹慶輝氏の将来された写真に基き、1932年『大正新脩大蔵経』巻85の古逸部に、ペリオ本の②が収録されて以来、その存在が知られるようになった全巻70数番の問答からなる唐代の文献である。標題の下には「沙門大照居士慧光集釈」とあり、一方尾題の方は『大乘開心顯解脱論』となっている。矢吹氏は1933年刊行の『鳴沙餘韻解説』において、本書をその序文によって、先に嵩岳慧安、後に荷沢神会に事えた大照禅師と、俗姓を李、名を恵光という居士との問答であるとし、その内容を「唐代南禅の一流」というように、南宗系の資料として位置づけられたのである。

次いでその翌1934年には、奉天の金九経氏が同じくペリオ本の②とそれを収録した『大正新脩大蔵経』本すなわち㊦とを対校し、『葺園叢書』3巻中の1巻として安心寺本『達摩大師観心論』と合刻で出版された。

こうして先ず資料紹介がなされたのであるが、それから5年後の1939年に至って、宇井伯寿氏がその著『禅宗史研究』の第5「荷沢宗の盛衰」に、本書に名を出す沙門大照を神会の弟子として挙げられ、また鈴木大拙氏の遺稿となった『禅思想史研究』第3は、1968年『鈴木大拙全集』巻3として初めて世に出されたものであるが、既に昭和20年すなわち1945年頃にその稿が成っていたという第1篇の「慧能示寂直後の禅思想」においては、南宗研究の材料として10種を挙げる最後に本書を挙げられたのである。このように、矢吹氏に始まり宇井氏鈴木氏を通じて、本書は一貫して南宗系の資料とみられてきたのであり、それが通説となっていたのである。それは弘忍下の南宗慧能と北宗神秀の禅風を、南頓北漸の対立というパターンで把え、従って頓悟を主張する本書は当然南宗禅に属するものという立場からなされた主張とみてよいであろう。

ところが、1960年代に入ると、この南頓北漸は新たな段階を迎える。

そのきっかけとなったのは、『禪門経』と『頓悟大乘正理決』が敦煌から出現したことである。まず1961年に敦煌出土 S. 5532 の『禪門経』を紹介論究された柳田聖山氏は、この『禪門経』の序者沙門慧光と、本書の内題にある沙門大照居士慧光との関係について触れられ、結局両者を別人とされたのであるが、一方1964年、神会門下の摩訶衍の入蔵について論究され、同時に①を写真で紹介された香港の饒宗頤氏は、両者の同一人説を立てられた。私は後述する論文で、両者の経歴を比較検討し、両者の別人説を立てたのであるが、この問題は更に本書自体の内題にある「沙門大照居士慧光」をどのようにみるか、という問題とも関連する。すなわち本文の「居士問曰。云々 大照禪師答曰。云々」で始まる問答形式から、「沙門大照」と「居士慧光」を別人とみて両者の問答とみる見方と、これを「時有居士，俗姓李，名惠光，是雍州長安人也，法名大照。」という序文からして、惠光は俗名、大照は法名、従って両者は同一人物とする見方に分れるのであり、前者をとるのが矢吹氏と饒氏、後者をとるのが柳田氏である。私も後者を取り、同一人物の自問自答、更には仮空の人物を立てての問答かともみたのであるが、尚最終的結論には達してはいない。

しかしながら、1960年代の柳田、饒両氏の関心事は、それ以前のいわゆる南頓北漸の対立として南北両宗を固定的にみる見方に対する批判として、新たな問題提起をすることにあつた。共に1952年、ポール・ドゥミエヴィル (Paul Demiéville) 教授によって出版された『ラサの宗論』 (“Le Concile de Lhasa”) で紹介された敦煌出土 P. 4646 の王錫撰『頓悟大乘正理決』によって、中国側頓門派の代表である摩訶衍が、自ら「依止和上，法号降魔，小福，張和上，准仰，大福六和上，同教示大乘禪門，自從聞法已来，経五六十年。」といていることに注目され、この内、降魔，小福，大福が、神秀下の降魔蔵，惠福，義福をさし、共に北宗禪を代表する人々であることから、摩訶衍の「頓悟大乘」の主張は、既に北宗禪の人々に芽生え始めていたものであり（柳田説）、更に摩訶衍は南北両宗の調和をしたのだ（饒説）という新たな主張がなされたのであり、この摩訶衍と同じ立場に立つものとして、柳田氏は『禪門経』の慧光を、饒氏は『禪門経』と本書の慧光を位置づけられたのである。

一方、私が本書に関心を持ったのは、むしろ本書の内容の上からで、神尾式春氏によって北宗の大通神秀の作なることが論証された『観心論』と本書との密接な関係についてである。両者共に巻頭に「観心」を心要とすべきを説いていること、両者に『温室経』の同一部分の引用があり、しかもそれによって大乘頓悟の立場を主張していること、三聚浄



戒についても同一の説示のあること等によって、本書の北宗撰述説を主張し、併せて『頓悟大乘正理決』『観心論』『禅門経』を連写する敦煌出土 P. 4646 についても、それが北宗頓悟の思想的背景を示す資料ではないかという推論したのであるが、北宗頓悟説の主張は、柳田、饒両氏と変るものではない。尚この時点で、私は饒氏の論文の存在を知らなかったのであるが、私の論文の公刊後、柳田氏から特に饒氏の論文のマイクロフィルムをご恵贈いただき、その内容を知ることができた。ここに記して氏の学恩に深く謝意を表したいと思う。

## 12 大乘五方便<sub>北宗</sub>〔大乘無生方便門，北宗五方便門〕

① S. 735 ② S. 1002 ③<sup>123</sup> S. 2503 ④ S. 7961 ⑤ P. 2058

⑥<sup>12</sup> P. 2270 ⑦ 生 24

〔移録〕③<sup>3</sup> 『大正新脩大藏経』卷 85 古逸部 pp. 1273b-1278a 1932.—⊕<sup>1</sup>

③<sup>2</sup> 『大正新脩大藏経』卷 85 古逸部 pp. 1291c-1293a 1932.—⊕<sup>2</sup>

⑤⑥<sup>12</sup> 久野芳隆「流動性に富む唐代の禅宗典籍—燉煌出土本に於ける南禅北宗の代表的作品—」〔『宗教研究』新 14-1 pp. 123-136〕1937.—⊕<sup>1</sup>

③<sup>3</sup> 宇井伯寿『禅宗史研究』pp. 449-467 1939.—⊕<sup>1</sup>

③<sup>1</sup>⑤⑥<sup>12</sup> 宇井伯寿『禅宗史研究』pp. 468-510 1939.—⊕<sup>2</sup>

③<sup>2</sup> 宇井伯寿『禅宗史研究』pp. 511-515 1939.—⊕<sup>3</sup>

⑤⑥<sup>12</sup> 久野芳隆「北宗禅—燉煌本発見によりて明瞭となれる神秀の思想—」〔『大正大学学報』30, 31 合輯 pp. 150-164〕1940.—⊕<sup>2</sup>

③<sup>2</sup> 『鈴木大拙全集』卷 3 pp. 161-167 1968.—⊕<sup>1</sup>

③<sup>3</sup> 『鈴木大拙全集』卷 3 pp. 167-189 1968.—⊕<sup>2</sup>

⑤⑥<sup>1</sup> 『鈴木大拙全集』卷 3 pp. 190-212 1968.—⊕<sup>3</sup>

⑥<sup>2</sup> 『鈴木大拙全集』卷 3 pp. 213-220 1968.—⊕<sup>4</sup>

③<sup>1</sup> 『鈴木大拙全集』卷 3 pp. 220-235 1968.—⊕<sup>5</sup>

### 〔論文〕

久野芳隆 流動性に富む唐代の禅宗典籍—燉煌出土本に於ける南禅北宗の代表的作品—〔『宗教研究』新 14-1〕1937.

宇井伯寿 北宗禅の人々と教説(二)〔『仏教研究』2-4〕1938.—尚これは後に、『禅宗史研究』pp. 344-374 1939. に収録。

宇井伯寿 北宗残簡 6 大乘無生方便門，7 大乘五方便<sub>北宗</sub>，8 無題，9 無題 附讚禅門詩〔『禅宗史研究』pp. 424-427〕1939.

久野芳隆 北宗禅—燉煌本発見によって明瞭となれる神秀の思想—〔『大正大学学報』30, 31 合輯〕1940.

- 増永靈鳳 大乘無生方便門の研究〔『印度学仏教学研究』3-2〕1955.  
 関口真大 神秀の大乘五方便〔『禅宗思想史』pp. 102-108〕1964.  
 鈴木大拙 慧能示寂直後の禅思想 1〔『鈴木大拙全集』pp. 5-40〕1968.  
 武田 忠 大乘五方便の諸本の成立について〔『印度学仏教学研究』19-1〕  
 1970.

〔略記〕本書は一論四経に基き、問答体でもって北宗禅の要諦を5項目にわたって詳説した長篇の北宗禅綱要書である。嘗ては北宗禅の内容については、圭峰宗密の『禅源諸詮集都序』や『禅門師資承襲図』等によって、間接的にその概要を窺うにすぎず、しかも北宗系が早く衰退して、後代は南宗系のみが隆盛となり、南宗系の代表的文献として重んじられてきた『六祖壇経』の主張によって、北宗禅を傍系として軽視する風潮が永い間支配的であったことは、否定できない事実である。

ところが、今世紀初頭の敦煌文献の出現は、多くの北宗禅系資料を学界に提供し、初期禅宗史の研究に一時期を劃する契機となった。すなわち北宗系の燈史である『傳法寶紀』や『楞伽師資記』が、史書としての北宗禅の根本資料とするならば、本書は『観心論』と共に、北宗禅の思想、教説を示す根本資料というべきものである。これら新資料を最初に紹介し、その資料によって北宗禅の学問的研究に劃期的な業績をのこされた人こそ、久野芳隆氏と宇井伯寿氏である。

本書が最初に世に出されたのは、矢吹慶輝氏が大英博物館で撮影し将来された写真によって、『大正新脩大蔵経』巻85古逸部に収録されたもので、それには③<sup>3</sup>と③<sup>2</sup>が含まれている。元来この写本③のS. 2503は、かなり複雑な形態の文献で、全28紙623行からなる長篇の卷子本であるが、紙質は、首部9紙が非常に薄い白っぽい紙、第10紙よりやや厚みを増して野入りとなり、更に第13紙からは茶色っぽくなって、野がなくなる代りに折り目がつくといった具合である。

紙質ばかりではない。内容の方も、首部を欠いた第1紙より第15紙7行目までで一旦擱筆して以下25.5cmの余白があり、この部分が③<sup>1</sup>で、宇井氏の『禅宗史研究』第8「北宗残簡」の「第8篇 乙無題」、すなわち③<sup>2</sup>の下の部分、及び近年出版された『鈴木大拙全集』巻3の第4号本、すなわち③<sup>5</sup>に相当する。

次に第16紙から第18紙までが③<sup>2</sup>で、これは末尾に「讚禅門詩一首」として、七言四句の詩と、その後「丁卯年二月廿三日沙弥明慧記」という奥付があり、『大正新脩大蔵経』巻85では「讚禅門詩」の首題を新加して収録された④<sup>2</sup>である。しかしこの首題の新加は、宇井氏も指摘されている通り明らかに誤りで、『讚禅門詩』自体は、卷末の僅か七言

四句にすぎず、それ以外はやはり本書の一異本である。この部分は宇井氏の「第9篇 無題」、すなわち㊦<sup>3</sup>と、鈴木氏の第1号本、すなわち㊦<sup>1</sup>に相当する。

最後に第19紙以下第28紙までは、『大乘无生方便門』の首題で始まる部分で、尾部は断欠しているが、これが㊦<sup>3</sup>であって、『大正新脩大藏經』巻85では、『大乘無生方便門』の標題で掲げられ、宇井氏の「第6篇 大乘無生方便門」、すなわち㊦<sup>1</sup>と、鈴木氏の第2号本、すなわち㊦<sup>2</sup>に相当する。

このように三つの部分からなり、しかも首尾共に欠く複雑な写本であり、ライオネル・ジャイルズ (Lionel Giles) 氏は、その目録で㊦<sup>3</sup>と㊦<sup>1</sup>が接続するようにみておられるが、内容的には同一でも、接続の点には問題があり、更に氏は丁卯年を607年? として、㊦を600年頃の写本とみておられるが、北宗禪の資料がその祖とされる神秀(606?-706)の出世以前に書写されることはあり得ないことである。因みに宇井氏は、この丁卯年を宣宗の大中元年(847)と推定され、一方鈴木氏は787年(徳宗の貞元3年)とみておられる。

以上の如くスタイン本では、まず最初に㊦が『大正新脩大藏經』並に宇井氏によって紹介されたのであるが、一方ペリオ本中にも2種の文献のあることをパリで発見された久野氏が、宇井氏の『禪宗史研究』(1939)に先立つ2年前の1937年、『宗教研究』新14-1に、「流動性に富む唐代の禪宗典籍—燉煌出土本に於ける南禪北宗の代表的作品—」と題する論文、すなわち㊦<sup>1</sup>を發表され、巻末に「北宗の代表作『大乘五方便北宗』南禪の一作品『絶観論』の原文を、二本或は三本対照して紹介する。」として、本書並に『絶観論』の本文を紹介された。『絶観論』は、今日では関口真大氏によって、これが南宗禪のものではなくて、牛頭法融の手になる牛頭禪の代表的作品であることが論証されたが、鈴木大拙氏による北京本閏84と積翠軒本の紹介、柳田聖山氏によるP. 2045の紹介に先立つ『絶観論』の学会への最初の発表として貴重なものである。

ところで、本書については、上記論文で㊦のP. 2058と㊦のP. 2270の2本を別々に紹介されたが、㊦は首部約3分の1で中断するもの、㊦は首尾完全である。宇井氏はこの久野氏の撮影将来された㊦と㊦の写真によって、『禪宗史研究』第8「北宗残簡」の「第7篇 甲大乘五方便北宗」、すなわち㊦<sup>2</sup>の上の部分にこれを掲げ、その下に㊦<sup>1</sup>の「第8篇 乙無題」を対照しつつ両者の校定をされたのである。従って、㊦<sup>2</sup>は両者が共通する部分以外は、上が久野氏撮影将来のペリオの㊦と㊦、下が矢吹氏撮影将来のスタインの㊦<sup>1</sup>というわけである。更に鈴木氏は、『鈴木

大拙全集』巻3において、⑥を前半の⑥<sup>1</sup>と後半の⑥<sup>2</sup>とに分け、後者を前者の異本とみて別出し、⑤と⑥<sup>1</sup>を第3号本第1部、すなわち⑧<sup>3</sup>とし、⑥<sup>2</sup>を第3号本第2部、すなわち⑧<sup>4</sup>としてその本文を掲げられている。

この間にあって、久野氏は前記論文④<sup>1</sup>が、1936年滞仏中の執筆であったこともあり、あらためて帰国後の1940年、『大正大学学報』30,31合輯に、「北宗禪—燉煌本発見によりて明瞭となれる神秀の思想—」と題する北宗禪を総合的に研究した論文④<sup>2</sup>を發表され、再度④<sup>1</sup>と同じ本書の本文紹介を行っている。

以上、久野氏によるペリオの2本の発見紹介、宇井氏によるスタインの1本の紹介と、それらを総合した宇井、鈴木両氏の秀れた業績を概観し、従来本書に関して3本6種の異本の存在したことを知ったのであるが、近年、敦煌文献の調査の進展によって、更に『大乘無生方便門』の異本数種の存在することが知られるに至った。

その第1は、柳田氏の『初期禪宗史書の研究』巻末の「敦煌・禪宗関係資料一覧」によって知られた①の S. 735, 第2は、北京商務印書館編『敦煌遺書総目索引』に収録された「敦煌石室経巻中未入蔵経論著述目録」の1295によって知られた⑦の北京本生24, 第3は、私が東洋文庫での調査で知った②の S. 1002, 第4は、昭和47年(1972)6月大英博物館の書庫で、スタイン将来の未整理文献を調査した際に発見し、「イギリス・フランス留学記」[『駒沢大学仏教学部論集』3 1972.]にその存在を報告した④の S. 7961である。しかも後の2本の如きは、極めて短い断片に過ぎず、やはり本書の中心は久野、宇井両氏の紹介になるものである。

特に本書は、異本相互の間に極めて出入の多いことが特色であり、従って宇井氏、鈴木氏共に、本文紹介に当っては、その内の一本を底本として他を対校するという方法をとらず、各々別個に掲載されているのであって、この点からしても本書の成立、伝承に際しては、かなりの曲折のあったことが窺われる。鈴木氏はそうした各異本の成立の前後関係についても考察の手を加えておられるが、それをふまえて近年武田忠氏が、「大乘五方便の諸本の成立について」[『印度学仏教学研究』19-1 1970.]と題する論文を發表されたのも、本書のこうした特徴を如実に物語るものである。

### 13 大乘心行論 稠禪師

① P. 3559

[移録]① 柳田聖山『初期禪宗史書の研究』図版 16B-18B 1967.

## 〔論文〕

柳田聖山 傳法寶紀とその作者—ペリオ 3559 號文書をめぐる北宗禅研究資料の札記, その 1—〔『禅学研究』53〕1963.

〔略記〕本書は標題の下に「稠禪師」という内題があるが、もとより稠禪師自身のものかどうか疑問視され、他の稠禪師の作品と同じく、後人の稠禪師への仮託によるものとみられている。稠禪師すなわち僧稠（480-560）は、達摩と同じ頃、河北で神異による独特の禅風を挙揚し、達摩と並び称せられていたことが、道宣の『続高僧伝』の習禅篇によって知られているが、彼の禅法そのものはむしろ小乘的なものであって、大乘の立場に立つ本書が、稠禪師自身のものであるということとはありえない、というのが柳田聖山氏の説である。

ところで本書の内容はかなり複雑なものであるが、その中心的立場は、『華嚴経』の三界唯心に立って、一切はこの一心に基くという一多相即を述べ、心性清浄の立場から六波羅蜜や十善業の実践行に新たな意味づけをなし、守心を本と為すべきことを説く等、極めて大乘的色彩の強いものである。『維摩経』と初期禅宗との密接な関係は、かねてからいわれるところであるが、特に本書が守心を説き、華嚴の立場を強調するところは、華嚴禅の傾向の強い北宗禅系のものであることを示し、また北宗禅の中心思想というべき大乘五方便の第四門は、『思益経』に基いて諸法の正性を明らかにするものであるが、本書が『維摩経』『華嚴経』と共に、『思益経』を重視している点も、本書の北宗系であることを物語るものと考えられる。

本書の唯一の資料である①は、『傳法寶紀』をはじめ北宗系資料を総集したものであるが、その中に本書が書写されていることも、そうした本書の基本的性格を示すものであろう。

## 14 大乘北宗論

① S. 2581

〔移録〕① 『大正新脩大蔵経』卷 85 古逸部 pp. 1281c-1282a 1932.—②

①② 宇井伯寿『禅宗史研究』pp. 447-448 1939.

① 饒宗頤「神会門下摩訶衍之入蔵兼論禅門南北宗之調和問題」図版〔『香港大学五十週年記念論文集』1〕1964.

## 〔論文〕

宇井伯寿 北宗残簡 5 大乘北宗論〔『禅宗史研究』p. 424〕1939.

饒宗頤 神会門下摩訶衍之入蔵兼論禅門南北宗之調和問題〔『香港大学五十週年記念論文集』1〕1964.

〔略記〕 本書は矢吹慶輝氏撮影将来の写真により、1932年①が『大正新脩大藏經』巻85古逸部に収録され、更に1939年、宇井伯寿氏がその著『禪宗史研究』第8「北宗殘簡」の第5篇に、①と『大正新脩大藏經』本とを校定して再録紹介されたものである。宇井氏はその解説において、本書を「極めて簡単な文で而も同一趣意が繰返されて居るが、最重要な点は偈の第三句に心を忘すとある所に存する。」と述べ、北宗の忘心の主張に注目すべきを説かれている。而してその最後に、「此論の最後に大乘有十也とある一句は其意味が明瞭で無い。」と述べておられるが、この「大乘有十也」の「也」の字は、原写本では「地」であり、⊕及び宇井氏が共にこれを「也」と読んだのは、はなはだ疑問である。そしてこの最後の「大乘有十地」の一句は、改行してそれに続く「少〔=小〕乗有七地」以下、小乗大乘の修道の階位について述べた10行（但し最後の3行は細字）に接続すべきもので、恐らくその前までが『大乘北宗論』に属するものであろう。

すなわち本書は、その標題の下に「大乘心」とあるように、大乘心についてこれを「我尚不起布施心，何況慳貪心」の如き一定の形式を持って説示したものであり、宇井氏が第三句といわれるのは、その後「而重説偈」として「憂從心憂，樂從心樂，若忘於心，何憂何樂」とある四句中の第三句を指す。尚傍線を付した「忘」は、原本では「妄」とあって、宇井氏が改められたものであり、また「何」は、宇井氏は原本には「可」とあるといわれるが、実際は「何」である。

その後再び「有文有字名曰生死，無文無字名曰涅槃」の如き一定の形式でもって、13句を連ねて、生死と涅槃を対比して説示している。従って内容的には、とりたててこれが北宗の主張を述べたものという特色は見出せず、あえて求めるとすれば、やはり宇井氏が提起された偈の中の「忘心」に注目すべきであろう。

その後本書に関する論文は、1964年の饒宗頤氏のものまで待たねばならないが、氏はその論文に加えて、S. 4286の『大乘開心顯性頓悟真宗論』、S. 1494の『臥輪禪師看心法』等と共に、本書の写真を資料として掲載し、神会が大乘禪定を論じて不用心、不看静、不観空、不住心等というが、それが実は北宗にも同様の説法があるという例証として、本書の四句の偈までの前半の部分を引用されている。そして本書の説く「北宗的大乗心」と「南宗的最上乘」とは、結局別のものではない、という氏の南北宗調和説の論拠とされているのである。

このように本書は、先の『大乘開心顯性頓悟真宗論』の略記で述べたと同様に、大乘頓悟を主張する北宗禪の一資料とみることができると考

えられる。

## 15 達摩禅師論

### ① 橋本凝胤氏所蔵本

[移録]① 関口真大『達摩大師の研究』首部図版

① 関口真大『達摩大師の研究』pp. 445-450 1957.

[論文]

関口真大 「達摩禅師論」と達摩大師〔『達摩大師の研究』pp. 49-81〕1957.

関口真大 新資料「達摩禅師論」(燉煌出土)について〔『印度学仏教学研究』6-2〕1958.

中川 孝 達摩禅師論(敦煌出土)考〔『東洋学』2〕1959.

中川 孝 敦煌出土達摩禅師論に就いて〔『印度学仏教学研究』8-1〕1960.

田中良昭 菩提達摩に関する敦煌写本三種について〔『駒沢大学仏教学部研究紀要』31〕1973.

[略記] 本書は奈良薬師寺長老橋本凝胤氏の所蔵になる敦煌本で、他に異本もなく、我国に将来され現に我国にその原本が保存されている敦煌文献として、その資料的価値の極めて高いものである。これを広く学界に紹介されたのが、関口真大氏であり、1957年に出版された『達摩大師の研究』は、関口氏自身その序言の冒頭に、「本研究は、稀覯の新資料である敦煌出土『達摩禅師論』一卷の解説を中心として、広く禅観思想史全般の上から、達摩大師の思想の解明を試みたものである。」と述べられているように、本書の紹介と解説を中心とした達摩論の総合的研究として上梓されたものである。

従ってその首部には、原写本の写真を、巻末附篇には、その活字による本文を掲げると共に、本論でも、本書の構成と特色について、それを現在達摩の唯一の真説とされる『二入四行論』と対比しつつ、詳細な論究をされている。ただ本書が首部を欠いていることは、はなはだ惜しいことであるが、その末尾には「開耀元年六月普仁寺主道善受持日宣」という奥付があり、開耀元年(681)は、唐の高宗の代であり、禅宗では五祖弘忍の示寂後僅かに6年、神秀76才、慧能44才の年にあたる。もしこの奥付が本来存在したものであるならば、達摩論の中では最も古い成立になるものとして更に一段と価値を高めるものであるが、関口氏自身もこの奥付には、筆勢、位置、文字の大きさ、墨色等について疑義を挟まれ、単に「唐代の古写本」というに止めておられる。

しかし、その内容の面からは、一面『二入四行論』との共通点を挙げて、これが達摩の真説とすることも可能であるという立場と、四祖道信

の守一不移の坐禅看心や、五祖弘忍の守本真心との共通点から、達摩大師の説法そのままではなくその仮託であったとしても、弘忍時代以後のものではなく、少なくとも神秀、慧能以前のものに属するという立場の二面を挙げ、結論的には『二入四行論』と同次元に本書を位置づけようとされている。

これに対して中川孝氏は、「本論は思想用語文体上、達摩の二入四行論と一致せず、むしろ、四祖及び五祖には全面的に一致する。故に本論は恐らく五祖の門人が四祖並びに五祖の思想を総合して記述したものと考えられる。」と述べ、柳田聖山氏も『初期禅宗史書の研究』で、本書を「恐らく東山法門の綱要書の如くである。」と述べられている。

私も先に敦煌出土 P. 2039 の『天竺国菩提達摩禅師論』を紹介した際、本書の中に 650 年をそれ程遡らない成立とされる偽作の『法句経』の引用のあることや「頓生浄土」の立場の主張のあること等からして、本書を、達摩よりも四祖道信、五祖弘忍の思想禅風と同次元においてとらえるべきことを述べた次第である。

従って本書は、東山法門の立場に立つ達摩論の一種とみるのが妥当と考えられる。

## 16 稠禅師意〔大乘安心入道法（擬）〕

### ① P. 3559

〔移録〕① 柳田聖山「傳法寶紀とその作者—ペリオ 3559 號文書をめぐる北宗禅研究資料の札記、その 1—」〔『禅学研究』53 pp. 57-58〕1963.

① 柳田聖山『初期禅宗史書の研究』図版 15B-16A 1967.

〔論文〕

柳田聖山 傳法寶紀とその作者—ペリオ 3559 號文書をめぐる北宗禅研究資料の札記、その 1—〔『禅学研究』53〕1963.

〔略記〕 本書の標題を『稠禅師意』とすることには、若干疑問がないでもない。というのは、①は北宗禅資料の総集ともいえるべきもので、多くの北宗禅資料の連写であり、本書の直前にある『先徳集於雙峰山塔各談玄理+二』は、十二人の先徳が雙峰山に集って、各々玄理を談論したという発想のもとに、十二人の祖師方の言を記したものであるが、その最後に「稠禅師意」とあって、この一句も或いはその中に含まれるべきものか、ともみられるからである。しかし首題末尾に、やや小さく「十二」とあるのは、十二人の意味であり、原写本は、以下十二人の祖師名の右肩に△印を付して、その名を明確にしているのに対して、十三番目の「稠禅師意」には、△印がなく、改行している（もっとも自然の改行ではある



が) ことからして、稠禪師はその十二人の中には含まないとみるのが妥当である。

ところで『稠禪師意』というのには、首題としてはやや不自然であり、柳田氏もこの4字は「何かの混入であろう。」とされているが、この4字以下直ちに「問。大乘安心入道之法如何。」で始まる5問答と、「夫安心者」で始まる安心の法に関する説示が続くところからすると、多少の誤記があったとしても、「稠禪師意」を本書の首題とみる方がより適切ではないか、と考えられる。もっともこれが首題であったとしても、大乘安心入道之法が稠禪師自身のものではなく、仮託のものであることは、先の『大乘心行論』の略記で述べた如くである。

特に安心之法は、達摩の真道として弟子曇林が伝えたものであり、四祖道信にも『入道安心要方便法門』があったといわれ、永明延寿の『宗鏡録』にも、『安心法門』の引用がある等、初期禪宗の中心テーマとして重視されたものである。本書では、「安心者、要須常見本清浄心」として「見心」を主張し、しかもその「見心」には、「不習二乘法、何能学大乘」といって、大乘安心の入道方便として、積極的に二乗法の学習を採用している点が注目される。方便法門は、東山法門から北宗禪系に発展した流れの中に位置づけられるものであり、頓悟漸修の立場に立つ本書が、北宗禪系資料とされるゆえんもここにあると考えられる。

## 17 天竹国菩提達摩禪師論

① P. 2039

〔移録〕① 田中良昭「菩提達摩に関する敦煌写本三種について」〔『駒沢大学仏教学部研究紀要』31 pp. 170-171〕1973.

〔論文〕

田中良昭 菩提達摩に関する敦煌写本三種について〔『駒沢大学仏教学部研究紀要』31〕1973.

〔略記〕 本書は首題は『天竹国菩提達摩禪師論』であるが、尾題は関口真大氏の紹介された橋本凝胤氏所蔵敦煌本『達摩禪師論』とまったく同一の一本である。この写本の表は、蕃僧法成が大中9年(855)から4年間にわたって、沙州竜興寺でなした『瑜伽論』の講義を、談迅、福慧の二人が聴いて録したとされる『瑜伽師地論分門記』であり、本書はその裏の最初に書写され、更に『大乘起世論』『三界唯心无外境論』『金剛經讚』の3種の文献が、本書に続いて連写されている。従ってその書写年代は、恐らく9世紀後半と考えられる。

一方本書の内容をみると、まず最初に、「禪門の法は経論の所説の如

く多義があって、直に一名には非ず。」という前置きをし、その別名として禅定門以下安心門に至る 15 門を列記し、ついで今度は最後の安心門から順次逆に 1 門ずつ最初の禅定門まで、その名称の由来を、経論の引用を交えながら説明する整然とした形式をとっている。特に安心門の説明の後に、「此出唯識論。」とあって、『成唯識論』をその典拠として明記していることから、その成立は玄奘によって『成唯識論』の翻訳された 659 年以後であることはいう迄もないが、一方、禅定門から安心門までの 15 門を列記しつつ、その説明は逆に安心門から始めて禅定門に終る逆形式がとられているのは、一般に初唐の文体形式とされ、この点からすれば、本書が初唐の成立ではないか、とみられるのである。

また内容面からも、本書は 15 門の別名の説明に際して、「常に心を看守するに由るが故に」という基本的立場を一貫して主張する。この「看守心」すなわち「看心」「守心」の立場は、四祖道信、五祖弘忍の東山法門の主張するところであり、更に各門の説明内容をみると、同じく東山門下念仏禅系の成立とみられる敦煌出土『南天竺国菩提達摩禅師観門』とも極めて密接であるところからして、本書が関口氏紹介の『達摩禅師論』と共に、東山法門の主張を祖述する達摩論の新資料として、貴重なものと考えられる。

本書の写真は、かねて藤枝晃氏によって撮影将来されていたが、判読できない部分も数カ所あり、実物による調査の必要性が感じられていたものである。幸い昭和 47 年（1972）夏にパリ国民図書館を訪問する機会に恵まれたので、その際実物に当たってそれを筆写し、前記論文にて紹介した次第である。

## 18 稠禅師薬方療有漏

① P. 3559

〔移録〕① 柳田聖山「傳法寶紀とその作者—ペリオ 3559 號文書をめぐる北宗禅研究資料の札記、その 1—」〔『禅学研究』53 pp. 61-62〕1963.

① 柳田聖山『初期禅宗史書の研究』図版 16A-16B 1967.

〔論文〕

柳田聖山 傳法寶紀とその作者—ペリオ 3559 號文書をめぐる北宗禅研究資料の札記、その 1—〔『禅学研究』53〕1963.

〔略記〕 本書は 8 種の薬品の効能に託して、有漏の病を療し、悟りに至らしめようとする習禅の心得を説いたもので、他の稠禅師の名を冠する諸文献と同じく、稠禅師に仮託されたものとされている。

柳田聖山氏によれば、本書と同巧異曲のものに、『志公薬方』と題するものが『禅門諸祖師偈頌』巻2にあり、敦煌出土 S. 3177 の『梁武帝問志公和尚修道』（擬）もこの『志公薬方』の末尾に連なるものとされている。尚この『梁武帝問志公和尚修道』（擬）は、これ以外に P. 3641 にも存在し、スタイン本は途中で擱筆しているが、このペリオ本の方は、その約2倍の長さがあり、首尾完全である。（尚この写真は昭和47年渡欧の際撮影を依頼し、既に将来済である。）

本書の示した煩惱を病とみ、修道を薬とみて、修道の薬によって煩惱の病をとり除き治療するという発想は、北宗禅の基本的立場を表詮する上で最も適した方法であり、『志公薬方』と共に、北宗禅系で創作された興味ある資料とみることができよう。

## 19 頓悟真宗金剛般若修行達彼岸法門要訣〔頓悟真宗要決〕

① S. 5533 ② P. 2799 ③ P. 3922

〔論文〕

柳田聖山 北宗禅の一資料〔『印度学仏教学研究』19-2〕1971.

〔略記〕 本書はその本文が未だ学会に紹介されていないものであるが、近年柳田聖山氏によって①と②の存在が、新たに報告されたものである。すなわち井ノ口泰淳氏の撮影将来になるペリオ文献70種の内、漢文文献を調査された柳田氏が、その中に初期禅宗史に関する新資料の重要なものとして、P. 2923 の『二入四行論』と P. 4940 の『般若波羅蜜多心経疏、資州説禅師撰』と共に②を挙げられ、それと関連する一異本として、柳田氏自身の発見になる①についても若干触れられたのが、本書に関する論考のすべてである。しかも前記柳田氏の論文の中心テーマは、P. 4940 の『般若波羅蜜多心経疏、資州説禅師撰』であって、それ以外の文献については、比較的簡単な解説があるにすぎない。しかしその中で本書に関するいくつかの重要な特徴を挙げておられる。

今それによれば、②は首尾109行からなる完本で、その後『観世音菩薩秘密无障礙如意心輪陀羅尼経』が写されていること。その標題から『大乘開心顯性頓悟真宗論』と密接な関係にあり、侯莫陳琰居士と智達禅師の問答という形式も、よく一致すること。この書には棣州刺史劉無得が先天元年（712）十一月五日に草した序があり、それによると侯莫陳琰居士は、雍州長安の人で、法号を智達といい、はじめ安闍梨に事え、後に秀和尚に事えて共に口決を受けた人であるというが、これが『頓悟真宗論』の編者を沙門大照居士慧光といい、はじめ安闍梨に事え、後に会和尚に事えて、共に口決を受けたというのと一致し、いずれか一方が

その様式を承けたに相違ないが、その前後関係は更に検討を要すること。更に候莫陳について、鈴木大拙氏紹介の『師資七祖方便五門』の末尾に、『候莫陳口決』なるものが収められ、北宗禪の思想形成に重要な契機をなした人であること。そして最後に、①についてこれが②の末尾に続くもので、両者に共通してその一部が『候莫陳口決』に抽出され、その全体にわたるチベット訳が、ペリオ本に存在するという上山大峻氏のサジェストもあり、北宗禪の形成について総合的再考の必要性をうながされているのである。

ところで、今一つ私は、パリで『法句経』の写本を調査中、偶然に本書の異本として、③の存在することを見出した。この③は、縦7cm、横29.5cmの貝葉式梵筈本で、横書きにされており、全9紙の内、7紙までが『法句経』、8紙表から9紙裏までの2紙4頁が本書である。（尚この写真も撮影を依頼し、既に将来済である。）首題は『頓悟真宗要決』で、それに次いで「候莫陳琰問 智達禪師口決」とあり、その後は②にみられる劉無得の序がなく、直ちに琰と知達禪師の問答に入るが、それが僅かに首部2紙4頁のみで、以下を欠いていることが惜しまれる。

一方注目すべきことは、柳田氏紹介の①のスタイン本も、やはり貝葉式梵筈本で、この方は縦20cm、横7cmの縦書きである。ただこの①は、全部で5紙しかなく、しかもその5紙は、第3紙と第10紙から第13紙までの4紙のみで、それ以外を欠いているのである。尚これと同一の紙質、形態をもった貝葉本に、S. 5532とP. 4646があり、紙の大きさこそS. 5532が20×7cm P. 4646が27×8cmと異なるが、共に厚手の黄褐色で、中央に綴目の孔があり、S. 5532には『観心論』『禪門経』が、P. 4646には『維摩経』『文殊説般若経』『頓悟大乘正理決』『観心論』『禪門経』が書写されている。

更に貝葉本の一つに、前述の鈴木氏紹介になる禿氏祐祥氏旧蔵の『師資七祖方便五門』があり、これはその後に『臥輪禪師看心法』を伴うものであるが、柳田氏も指摘しておられる通り、この『師資七祖方便五門』には、本書に出る『候莫陳口決』なるものが収められているし、臥輪禪師も『景德傳燈録』巻5神会伝には、偈によって慧能と悟境を争った人物として引合いに出されており、鈴木氏も彼を北宗系の人とみておられ、この貝葉本自体北宗系のものであることは間違いない。

すなわち以上掲げた数種の敦煌出土の貝葉本は、いずれも北宗系資料という点で共通し、本書もこれらを北宗系資料と一連のものと考えられる。